

入試方法の変更と保育学生の質の変化

—ピアノ実技の導入がもたらしたもの—

北川 歳 昭

Toshiaki Kitagawa

問 題

保育者養成の課題は、すでに量より質が求められる時代に入っている。これまで以上に質の高い保育者を養成できるか否かが、養成機関の存否の鍵をにぎっているといっても過言ではあるまい。

保育学生の質の高さを向上、維持するためには、どのような方策が講じられねばならないであろうか。まず第1に考えられることは、入学後の学生に対する教育課程とその内容の充実である。しかし、むしろ、根本的な問題は入学者選抜の段階にあるのではないか。つまり、質の高い入学志願者をいかに集め、その志願者の中からいかにして質の高い合格者を選抜するか、という入学者の選抜方法である。

本学保育科は、その1つの試みとして、昭和58年度の入試から「ピアノ実技」を導入している。導入実現に至るまでには、保育科音楽担当者からの強い要望等、次のような背景があった。①ピアノ技能は保育者の基礎的技能として不可欠であり、保育現場からもピアノ技能の優れた学生への要望が強まっていること、②ピアノ未経験の入学者が2年間で到達できる進捗には限界があり、ピアノ実技の成績不良が他教科の成績不振と結びつきがちであること、③近隣の他養成機関のほとんどではすでにピアノ実技が入試に取り入れられていること、などであった。

本学において、実際に導入されたピアノ実技の課題はバイエル中程度以上で、決して高い要求水準とはいえないものの、受験生にとっては、入試科目にピアノ実技が加えられたことの心理的な影響は小さくはなかったのではないかと想像される。

さて、「保育学生の質の高さ」を我々はどのように考えるべきであろうか。

これまでの研究から、就職後の保育者の職場適応性は、在学中の成績の良好さ(1)や、保育者志望の時期の早さと迷いの無さ(2)と関連しており、保育学生の保育者としての適性評価は、成績や知能の高さ(3)および安定積極的な性格特性(4)と相関する、とされている。

一方、ピアノ技能に関しては、成績良好な者は不振の者よりピアノ進捗の伸びが大きいこと(5)、また、ピアノ実技の成績は、収束的知能、成績全般および保育者適性評価とも相関する(3)、とされている。つまり、保育学生のピアノ技能には、特殊的・音楽的才能というよりも、より一般的な知的能力が深く関与していることが示唆されるのである。

以上のことから、保育学生の質の高さを、保育者に求められるピアノ技能を含めた全般的な能力の高さと適応的な性格特性と考えてよいであろう。

本研究の目的は、58年度入試から実施されたピアノ実技試験の導入が、その当初の目的である「保育学生の質の向上」にいかに関与したか、を実証追究することにある。

方 法

昭和57年度入学生（184名）および58年度入学生（171名）に対して、それぞれ入学後3カ月（7月上旬）の時点で、能力検査と意識調査を同時に行なった。

(1)多面式能力検査

兩年度生の知的能力を標準的な共通の測度で比較するため、多面式能力検査（CRATTI）を実施した。同検査は、従来の能力検査とは異なり、収束的知能のみではなく発散的知能も測定でき、合せて、個人の知能構造の特徴および認知傾向を知ることができるよう構成されている。

(2)保育学生意識調査

保育者志望の時期・本学入学の動機・ピアノ経験や進度・就職希望職種などについての質問10項目からなる記名式アンケート。項目内容の詳細は結果および付表を参照されたい。

結 果

資料が完全であった352名（57年度生183名、58年度生169名）について統計処理を行なう。

【1】 57年度生と58年度生の比較

入試科目変更の影響をみるため、ピアノ実技導入前後の57年度入学生と58年度入学生を比較する。

(1)知能偏差値（図1）

発散的知能（発散的思考力偏差値）には兩年度生の間にはほとんど差がみられないが、収束的知能（収束的思考力偏差値）では、57年度53.7、58年度生55.2と、58年度生が1.5高い。t検定の結果、10%レベルで有意である（ $t=1.66$, $df=350$ ）。

(2)知能構造類型（図2）

収束的知能と発散的知能の高さを組み合わせた知能構造4類型の比率を比較すると、58年度生は、57年度生に比べ、発散的知能のみすくれている「発散型」が6.8%減少しているのに対し、収束的知能も発散的知能も優れている、いわば理想的な知能構造の「統合型」が4.5%増加していることが注目される。ただし、全体比率の年度差は有意ではない。

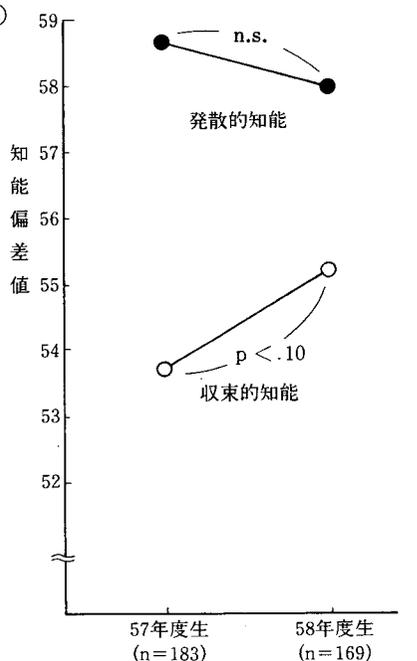


図1. 兩年度生の知能偏差値の比較

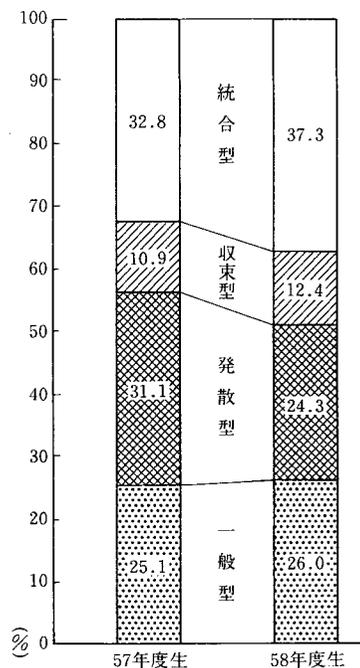


図2. 兩年度生の知能構造4類型の比率(%)

(3)保育者志望始期 (表1)

保育者になりたいと考え始めた時期が小学生またはそれ以前であった者は、57年度生では24%であるのに対し、58年度生では32%と、志望始期の早い者が58年度生にやや多い傾向があるが、全体比率の差は有意ではない。

(4)短大保育科進学決意時期 (表2)

保育科 (幼児教育科) 進学を決意した時期が入試直前の高校3年後半であった者は、57年度が21%であるのに対し、58年度は16%とやや少ない。58年度生では、高校2年および3年前半が最も多くなっている。年度差は有意ではない。

(5)本学保育科選択の理由 (表3, 表4)

中短保育科を選んだ決定的な理由を3つまで自由記述させた。表3のように、選択理由を代表的な8つの群に分類すると、最も多いのが「地理的条件の良さ」(通学可能, 交通便利など)で7割半, 次に「先生や先輩の勧め」で4割, 「家族や知人の勧め」が3割の順になっており, 本学家政科食物栄養専攻1年生の受験動機の分布(6)と類似している。年度差では, 「入試条件の良さ」(学力レベル, ピアノ実技なしなど)が57年度生に多いのに対し, 「保育者資格の取得」(保育者志望, 資格, 免許, 子ども好きなど)と「就職条件の良さ」(就職率・就職指導の良さなど)は58年度生に多い。年度差は, 0.5%レベルで有意である ($\chi^2=24.77, df=7$)。

さらに単独項目で詳しく見ると (表4), 57年度生に「自分の学力レベルに合っていた」(12%)と「ピアノ実技がないので」(9%)が多いことが注目される。一方, 58年度生では, 「就職率が良い」(12%)と「友人が受験したので」(12%)が多い。

(6)教育・保育関係者の存在

身近な人 (家族・親類・知人) の中に教育・保育に関係している人がいるかと問うた。在りと答えた者は, 57年度生では69%であったが, 58年度生では53%にすぎない。その差は0.5%レベルで有意である ($\chi^2=10.38, df=1$)。

(7)ピアノ開始時期 (表5)

ピアノ (オルガン) を習い始めた時期を問うと, 高校卒業以降に始めたと答えた者は, 58年度生に

表1. 両年度生の保育者志望始期 (%)

	就学前	小学校	中学校	高校1年	高校2年	高校3年
57年度生	6.1	18.2	37.6	13.3	11.0	13.8
58年度生	3.0	29.2	31.5	10.7	13.1	13.1

表2. 両年度生の短大保育科進学決意時期 (%)

	中学以前	中学時代	高校1年	高校2年	高3前半	高3後半
57年度生	3.3	16.6	17.7	20.4	21.0	21.0
58年度生	3.0	8.4	17.4	27.5	27.5	16.2

表3. 両年度生の本学選択理由群 (人数・%, 複数回答)

理由群	57年度生	58年度生
地理的条件の良さ	137(74.9)	123(72.8)
先生や先輩の勧め	77(42.1)	66(39.1)
家族や知人の勧め	54(29.5)	40(23.7)
設備・環境の良さ	33(18.0)	32(18.9)
保育者資格の取得	26(14.2)	38(22.5)
入試条件の良さ	47(25.7)	12(7.1)
学風・教育内容の良さ	30(16.4)	19(11.2)
就職条件の良さ	17(9.1)	24(14.2)

表4. 両年度生の本学選択の理由 (人数・%, 複数回答)

理由(単独)	57年度生	58年度生
進学が可能だから	104(56.8)	105(62.1)
担任の先生に勧められて	41(22.4)	41(24.3)
先輩に勧められて	23(12.6)	18(10.7)
就職率がよいから	16(8.7)	21(12.4)
学力レベルに合っていた	22(12.0)	11(6.5)
知人に勧められて	13(7.1)	16(9.5)
保育者になりたい	15(8.2)	13(7.7)
設備が良いので	18(9.8)	9(5.3)
近所に卒業生がいる	19(10.4)	6(3.6)
環境が良い	9(4.9)	14(8.3)
親に勧められて	16(8.7)	7(4.1)
友人が受験したので	3(1.6)	20(11.8)
ピアノ実技がないので	16(8.7)	0(0.0)

(上位のみ表示)

表5. 両年度生のピアノ開始時期 (%)

	就学前	小学校前半	小学校後半	中学校	高校1・2年	高校3年前半	高校3年後半	高校卒業後	短大入学後
57年度生	36.6	21.9	8.7	2.2	12.0	7.1	4.4	4.4	2.7
58年度生	37.9	20.1	11.8	2.4	12.4	9.5	6.1	0.0	0.0

は皆無なのに対し、57年度生には13名（7%）いるなど、58年度生の方が開始時期が有意に早い傾向がある（ $\chi^2=14.02$, $df=8$, $p<.10$ ）。

表 6. 両年度生のピアノ通算経験年数（%）

	なし	6カ月未満	6カ月以上	1年以上	2年以上	3年以上	5年以上	10年以上	15年以上
57年度生	<u>3.8</u>	7.1	6.6	12.6	8.7	18.6	30.1	11.5	1.1
58年度生	0.0	5.9	8.9	9.5	11.2	11.2	<u>34.3</u>	<u>17.2</u>	1.8

(8)ピアノ通算年数（表6）

短大入学までにピアノを習った通算年数は、5年以上の者が57年度では43%であるのに対し、58年度では53%おり、58年度生のピアノ経験年数は長い傾向がある（ $\chi^2=14.51$, $df=8$, $p<.10$ ）。

(9)ピアノ進度（表7）

現在レッスン中の曲名を記述させ、表9のように、その進度を9段階に分類した。57年度生では、ブルグミュラー前半までの初級水準のものが37%と多く、ソナチネ中程以上の上級水準のものが32%と比較的少ないのに対し、58年度生では、逆に初級水準が21%と少なく、上級水準が40%と多い。58年度生の進度は高く、年度差は0.5%レベルで有意である（ $\chi^2=23.43$, $df=8$ ）。

表 7. 両年度生のピアノ進度（%）

	バイエル前半	バイエル中間	バイエル後半	ブルグミュラー前半	ブルグミュラー中間	ブルグミュラー後半	ソナチネ前半	ソナチネ中間	ソナチネ後半 ソナタ以上
57年度生	0.5	<u>10.4</u>	14.2	12.0	9.3	7.7	13.7	16.4	15.8
58年度生	0.0	0.6	11.8	8.9	17.8	7.7	13.0	18.9	<u>21.3</u>

(8)保育系部活動への参加

保育に関連の深い自主サークル（部・同好会）への参加の割合は、57年度生が37%であるのに対し、58年度生は31%とやや少ないが、有意ではない。

(1)希望職種（表8・A）

就職したいと思っている職種を希望順に3位まで記述させた。第1希望を集計すると、57年度生では、保育所保育（45%）と幼稚園教諭（44%）がほぼ並んでいるのに対し、58年度生では、幼稚園教諭が59%で保育所保育が34%と幼稚園志向が強まっている。また、一般事務等の非保育専門職を第1希望にしているものは、57年度で3%いるのに対し、58年度生では皆無である。年度差は5%レベルで有意である（ $\chi^2=12.48$, $df=5$ ）。

表 8. 両年度生の希望職種および実現予想職種（%）

	A 第1希望職種		B 第1実現予想職種		C 予想(B)希望(A)	
	57年度生	58年度生	57年度生	58年度生	57年度生	58年度生
幼稚園教諭	44.3	<u>58.6</u>	20.2	22.5	- 24.1	- 36.1
保育所保育	<u>45.4</u>	33.7	36.6	<u>43.2</u>	- 8.8	+ 9.5
施設保育	4.9	4.1	6.0	2.4	+ 1.1	- 1.7
音楽教室講師	2.2	1.8	1.1	3.6	- 1.1	+ 1.8
一般事務員等	2.7	0.0	<u>19.1</u>	9.5	<u>+ 16.4</u>	+ 9.5
不明・無答	0.5	1.8	17.0	18.9	+ 16.5	+ 17.1

(2)実現予想職種（表8・B）

実際に就職することになりそうな職種を3位まで記述させた。第1位のみ集計すると、両年度とも、保育所保育が最も多く、幼稚園教諭が続いている。また、不明としたものおよび無答も2割近くに上っている。年度差では、57年度生では一般事務が19%と多いのに対し、58年度生では保育所の保育が43%と多いのが注目される。全体の比率の差は5%レベルで有意である（ $\chi^2=12.09$, $df=5$ ）。

希望と実現予想との食い違いをみると（表8・C）、両年度とも、一般事務等の非専門職や不明（無答）の予想が増大し、保育専門職への就職の見通しの暗さを感じとっているようだが、その中で、58年度生では、保育所保育への就職実現予想の割合が希望の割合よりも大きくなっているのは興味深い。

【2】 ピアノ進度との関係

ピアノ試験導入前後の両年度生の間で最も明瞭な差異が見出せたのは、やはりピアノ進度においてであった。ピアノ進度に差があることは、何を意味しているのであろうか。その手掛りを得るため、57年度生と58年度生を込みにして、ピアノ進度によって、3つの群(ブルグミュラー前半までの初級水準の「低群」=104名, ソナチネ前半までの中級水準の「中群」=121名, ソナチネ中間以上の上級水準の「高群」=127名)に分け、その群差をみる。

(1) 知能偏差値

図3のように、発散的知能にはピアノ進度と一貫した関係が認められないが、収束的知能では、進度が高くなるほど、偏差値は53.2, 54.9, 55.4と高くなっている。低群と高群の間には10%レベルで有意な差が認められる(t=1.95, df=229)。

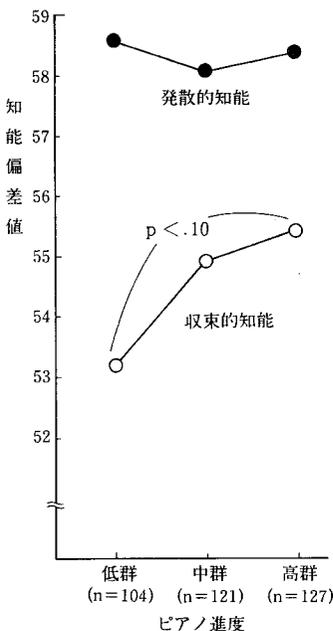


図3. ピアノ進度と知能偏差値

(2) 知能構造類型

図4のように、低群には発散型が比較的多いのに対し、中、高群では、統合型の比率が高くなっている。ただし、群差は有意ではない。

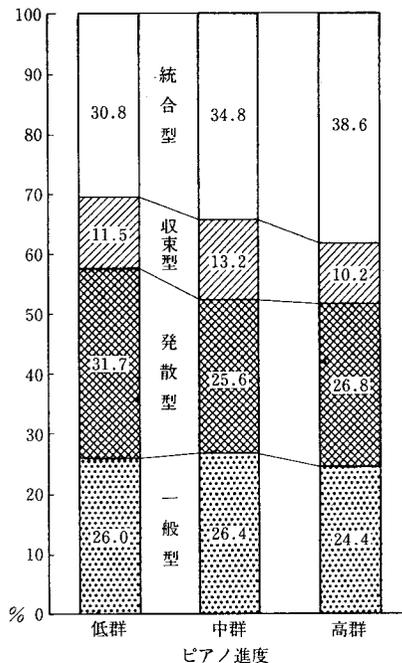


図4. ピアノ進度と知能構造類型の比率(%)

図3. ピアノ進度と知能偏差値

(3) 保育者志望始期 (表9)

ピアノ進度の高い者ほど、小学校時代までに保育者を志望し始めた者の割合が多い($x^2=17.23$, $df=4$, $p<.005$)。

表9. ピアノ進度と保育者志望始期(%)

ピアノ進度	小学校まで	中学校以降	高校2年以降
低群	21.3	44.7	44.0
中群	26.4	57.9	15.7
高群	35.2	37.6	27.2

表10. ピアノ進度と短大保育科進学決定時期(%)

ピアノ進度	中学校まで	高校1・2年	高校3年
低群	9.6	36.5	53.9
中群	19.8	40.5	39.7
高群	17.1	46.3	36.6

(4) 短大保育科進学決意時期 (表10)

進度の高い者ほど、高校3年になってから保育科進学を決めた者の割合が少ない($x^2=9.58$, $df=4$, $p<.05$)。つまり、ピアノ進度が進んでいる者ほど保育職への進路決定の時期が早いといえる。

(5) ピアノ開始時期 (表13)

ピアノ進度の高い者ほど早くからピアノを始めている($x^2=89.11$, $df=4$, $p<.001$)。

表11. ピアノ進度とピアノ開始時期(%)

ピアノ進度	小学校まで	中学校以降	高校3後半以降
低群	44.2	29.8	26.0
中群	64.5	32.2	3.3
高群	92.1	7.9	0.0

表12. ピアノ進度とピアノ開始時期(%)

ピアノ進度	2年未満	5年未満	5年以上
低群	68.3	24.0	7.7
中群	18.2	39.7	42.1
高群	2.4	11.8	85.8

(6) ピアノ通算年数 (表12)

進度が進んでいる者ほどピアノの経験年数が長い($x^2=190.28$, $df=4$, $p<.001$)。

(7) 教育・保育関係者の存在

「在り」と答えた者の割合は低群58.6%，中群57.9%，高群69.3%と、高群が高い傾向があるが、有意ではない。

(8)保育系部活動への参加

保育系の部・同好会に参加している割合は、低群31.7%，中群39.7%，高群29.9%で、ピアノ進度が中程度の者の参加率が最も高い。群差は有意ではない。

(9)希望職種（表13・A）

幼稚園教諭希望は高群に多く、保育所保母は中群に多く、施設保母は低群に多い。また、音楽教室講師は高群に多く、一般事務員は低群に多い。しかし、全体では群差は有意ではない。

表 13. ピアノ進度と希望職種および実現予想職種（%）

	A 第1希望職種			B 第1実現予想職種			C 予想(B)-希望(A)		
	低群	中群	高群	低群	中群	高群	低群	中群	高群
幼稚園教諭	45.2	52.1	55.1	16.3	20.7	26.0	-28.9	-31.4	-29.1
保育所保母	40.4	44.6	34.6	31.7	53.7	33.1	-8.7	+9.1	-1.5
施設保母	7.7	2.5	3.9	8.7	1.7	3.1	+1.0	-0.8	-0.8
音楽教室講師	1.9	0.0	3.9	1.9	0.0	4.7	±0.0	±0.0	+0.8
一般事務員等	3.8	0.8	1.6	21.2	13.2	13.4	+17.4	+12.4	+11.8
不明・無答	1.0	0.0	0.8	20.2	10.7	19.7	+19.2	+10.7	+18.9

(10)実現予想職種

表13・Bのように、全体として保育専門職への就職の予想は

減少し、一般事務職への予想が増加しているが、その傾向は特に低群において著しい。保育所保母が中群において希望よりも増加していること、低群と並んで高群においても不明・無答が増大し、不安を表明しているのが注目される。群差は0.1%レベルで有意である（ $\chi^2=31.63$, $df=10$ ）。

考 察

入試科目の変更によって保育学生の質が変化していた、と結論してよいであろう。すなわち、57年度生に比べて、入試にピアノ実技が取り入れられた58年度生のピアノ進度は確実に向上していたのである。

この年度差が偶然生じたものである可能性はないわけではない。しかし、その年度差の方向が合理的必然性を伴ったものであるなら、年度差による入試科目の変更と学生の質の変化は因果関係にあると考えてよいであろう。

例えば、58年度の保育科入学志願者数は、57年度と比べて35名減少している。これは、本研究でも明らかになったように、本学進学の原因に「入試条件の良さ」を挙げた者が47名（57年）から12名（58年）へと減少したことと関連するであろう。すなわち、入試にピアノ実技がない、学力レベルが合っている、商業科からでも受験できる、入試の科目数が少ない、などの入試条件の難易度の低さを理由に志願していたレベルの受験生の多くは、58年度からのピアノ実技の導入によって、志願そのものを断念し、入試によってさらに振り落されたのであろう。その意味で、入試科目の変更は、入試の合否判定の資料としての効力に影響するばかりではなく、受験校を選択しつつある受験生の心理に効果的な影響を与えたと考えることができる。

さて、ピアノ進度の向上という質の変化に伴って、同時にいくつかの側面でも学生の質に変化がみられた。

まず、第1に知的能力の上昇である。収束的知能偏差値が上り、理想的な「統合型」の比率が増大したのである。ピアノ実技の入試導入で、いわゆる「頭の良い」学生の割合が多くなったと考えてよい。この連関性は、ピアノ技能と一般的能力や知的実行との相関(3, 5)からも容易に理解できる。年度差に表われたこの潜在的な能力の差は、実際行動や課題達成の上にも顕在化するにちがいない。追跡研究する必要がある。

第2に、保育専門職への志向の強さである。これには、2つの面が含まれている。

1つは、保育者志望時期の早さである。保育者は、単なる「子ども好き」(暖かい愛情)だけではすまされない広範な知識と高い技能と深い理念とを求められるが、それらの醸成には、ピアノ技能の修得と同様に、長期的な見通しをもった持続的な強い意志を必要とする。ピアノ進度の向上は、ピアノ経験の長さと同相するの当然であるが、保育志望始期の早さ、つまり志望意志の持続的な強さとも結びついていることがうかがえるのである。

今1つは、保育専門職への就職希望の強さである。ピアノ技能や他の能力に自信があるためか、保育者志望始期の早さからくる志望意志の堅さのためか、58年度生は、57年度生に比べ、また、ピアノ進度の高い者ほど、幼稚園・保育所などの専門職種への就職希望者および就職実現予想者の割合が多い。

いずれにせよ、目標志向の強さは、「保育者の質」の向上の前提となるにちがいない。

ピアノ進度の向上に伴う学生の質の変化の第3は、ユニークな学生の減少である。58年度生には、57年度生に比べ、発想豊かな「発散型」が減少し、保育系部活参加者も減少の傾向があった。主観的にはあるが、確かに、(学業成績やピアノ実技などではあまり振わないが)学内行事や部活では強力な指導性を発揮し、精力的に活動する、創造性豊かでおもしろ味のある一群の学生が少なくなった感がある。ピアノ実技の入試導入によって、まじめで努力型の学生が増大したと同時に、ややまじめさには欠けるものの朗らかでバンカラ風の行動派の学生が減少したのである。つまり、今回の入試方法の変更は、保育学生の「質」の向上とともに、保育学生の多様性の幅を狭めることにつながっているのかもしれない。

今回の研究は、入学後3カ月の時点での学生の意識調査と能力検査の結果について分析したものであった。両年度生の比較から明らかになった「質の変化」が、その後、学業成績や他の学内生活、また就職状況や就職後の適応性に関して、どのような影響を及ぼしたかについては、今後さらに追究しなければならない。

現在の入試方法や教育課程に、現代社会からの要請に合った質の高い保育者の養成をめざす上で、改善すべき点は何か。保育者養成機関に課せられた課題は重い。

文 献

- 1) 烏野博文・井村圭壮・門田光司, 1984, 保母養成の研究—学業成績と就職の関連について—, 全国保母養成協議会第23回研究大会発表論文集, 70-71
- 2) 岡山県保母養成協議会心理学専門委員会, 1976, 保育者の職場適応, 全国保母養成協議会第15回研究大会発表論文集, 29-30
- 3) 北川歳昭, 1984, 保育者適性の予測変数—知能・成績・実習評価—, 全国保母養成協議会第23回研究大会発表論文集, 88-89
- 4) 北川歳昭, 1983, 保育者適性—教師評価・自己評価と性格特性—, 全国保母養成協議会第22回研究大会発表論文集, 34-35
- 5) 大原正義・曾我部司・土谷由美子・福田順子, 1983, 学力とピアノ進度についてその1, 中国短期大学紀要, 14, 102-103
- 6) 大羽和子, 1983, 短期大学家政科学生の修学意識と不安の実態, 中国短期大学紀要, 14, 27-32

〈付 記〉

本研究を行なうにあたり, ピアノ進度の分類基準に関しては, 保育科音楽担当の大原正義先生, 曾我部司先生, 土谷由美子先生から貴重な助言をいただきました。また, 資料の集計作業には, 保育科研究室の沢津まり子さんと久世好江さんのご協力を得ました。記して感謝いたします。

付表

保 育 学 生 意 識 調 査

昭和 年 月 日

年 組 番 氏名

以下の質問には、当てはまる答えの番号に○をつけ、また空欄には具体的に書き入れてください。

- (1) あなたは、どの入学試験を受験しましたか。
 1. I期推せん 2. II期推せん 3. 試験選考
 受験番号 () 忘れた人は書かなくてよい。
- (2) あなたが保育者 (幼稚園教諭, 保母) になりたいと考え始めたのはいつごろですか。
 1. 小学入学以前 2. 小学生時代 3. 中学生時代
 4. 高校1年生 5. 高校2年生 6. 高校3年生
- (3) 短大保育科 (幼児教育科) 進学を決意したのはいつでしたか。
 1. 中学時代以前 2. 中学時代 3. 高校1年生
 4. 高校2年生 5. 高校3年生前半 6. 高校3年生後半
- (4) 中国短大保育科を選んだ決定的な理由を3つ書いてください。
 1.
 2.
 3.
- (5) あなたの家族, 親類, 知人の中に、教育・保育関係に勤めている (勤めていた) 人がいますか。
 1. いない
 2. いる (具体的に)

あなたとの続柄	職業 (例, 保育所保母)

- (6) ピアノ (オルガン) を初めて習い始めたのはいつごろですか。
 1. 小学校入学前 2. 小学生前半 3. 小学生後半
 4. 中学生 5. 高校1,2年 6. 高校3年前半
 7. 高校3年後半 8. 高校卒業後～短大入学前 9. 短大入学後
- (7) 短大入学までに、ピアノ (オルガン) を通算して何年間習いましたか。
 1. 習っていない 2. 6カ月未満 3. 6カ月以上
 4. 1年以上 5. 2年以上 6. 3年以上
 7. 5年以上 8. 10年以上 9. 15年以上
- (8) 現在のピアノの進度 (レッスン中の曲名) を具体的に書きなさい。
 ()
- (9) 現在、部 (同好会) や学外サークルなど課外活動に参加していますか。
 1. 何も入っていない
 2. 所属しているが活動していない。(具体的に)
 3. 活動している (具体的に)
- (10) あなたが現在、就職したいと思っている職業を希望順に3位まで書きなさい。(公立, 私立を書いてもよい)
 1位
 2位
 3位
- (11) あなたが現実問題として、実際に就職することになりそうだと思う職業を可能性の高い順に3位まで書きなさい。(公立, 私立を書いてもよい)
 1位
 2位
 3位

以 上